

## 研究経過報告

村上 隆

80年8月から82年7月までの経過について述べる。

## 1. 3相データの因子分析

当面、最大限の勢力を注ぐことにしているテーマである。79年度の本紀要に発表した「準3相因子分析法」はアルゴリズムの整備を含め若干洗練した形で、81年度の本紀要に記述した。更に改良した手法は、Quasi three-mode principal component analysis と題した英文論文として Behaviormetrika 誌上にあらわれる筈である。その後、共通性推定を含むモデルとしてより因子分析的に改善された手法は、今年度の行動計量学会において発表されたが、これも可及的速かに論文にまとめる計画である。今後は、同様の目的をもつ幾つかのモデルとの関連を洗い直し、また、準3相モデルをそれらのモデルと同等の形に変換するプロセスについて検討を進めることを予定している。

それとは別に、一般のSD法タイプのデータに対する扱いも検討を開始している。基本的には Tucker 流の3相因子分析に依拠しながら、それよりもいわば分節されたモデルとなるであろう。Tucker のモデルが多くの人々の注目を集めながら実用化されてこなかった理由は、余りにも一般的で万能型のモデルでありすぎたためであると考えられる。「準3相モデル」が多少とも成功したとすれば、全くの探索的立場よりは、もう少し限定された特定の変化のパターンを明らかにすることをねらったことによっていると思われる。SD型データについても同様の方針で臨むことにより、実用的なモデルが開発されるであろう。

## 2. 一次元尺度構成

学生時代からのテーマであり、ここ数年前記のものと2本立で進めてきたが、本年の日本心理学会の発表を最

後に、当分休止を決意した。主たる理由は、余りの trivialism に自分でもいやがらさした、ということである。それと関連するが、先のテーマと比べて学会等での反響が少ないことに discourage されたこともある。(流行に左右される主体性のなさ、とも言えるが、これはテーマ自体の意味、価値の反映のように思われる。) 今後は、この領域でわずかながら得てきたものを、個人差測定領域で生かす努力をしたいと思う。

## 3. 敬語のモデル

ご多聞にもれず、「特定研究」のための(私の場合は)苦しまぎれの思いつきだったが、意外と面白く、ヒマをみて少しずつ進めている。日本語の敬語が、日本人独特の人間関係(というものがあるとして)のあらわれ、または規定因の一つであることは、一応認めていただけるものと思う。従来、敬語意識、あるいは実際の敬語行動に関する empirical な研究は決して少なくないが、我々は個人のもつ敬語規範の方に焦点を合わせている。ある場面で、あることを言うとき、何らかの待遇表現が必然的に含まれるのが、日本語の発話の特徴と考えられるが、その rule は複雑でありながら、形式的な表現が可能であるように見える。そしてその rule は個人によって異なっている。その rule を個人の反応から推測することは、データ解析の面からも興味ある問題である。我々の考え方や若干のデータに基づく議論は、この地区の日本語研究者の集りである「名古屋ことばのつどい」で発表し、暖くむかえられた(と信じている)。

ただ、この種のテーマが、ガラにもない speculative な「日本人論」につながりがちであるのには、自分でも驚いているが、厳にいましめていきたい。(増井透氏との共同研究である。)

## 研究経過報告

二宮 克美

## 1. 個人研究について

これまで、児童の道徳的判断の発達過程において、Gutkin (1972) の4段階が例話の主題(「過失」「嘘」ならびに「盗み」)が異なっても存在することを確認してきた。今年3月には、これらの主題における Gutkin の4段階の発達の同時性について検討した。この結果は、

7月中旬の日本心理学会第46回大会で、「児童の道徳的判断の発達」と題して発表した。また、これまでの結果とあわせて、「児童の道徳的判断の発達に関する一研究：Gutkin の4段階説の発達同時性の検討」と題して論文のかたちにとまとめたところである。

この Gutkin の4段階が、Baldwin & Baldwin (1970)